

でんでん太鼓にひょうの笛

子守歌考の内

真 鍋 昌 弘

伝承童謡については、多様な深めるべき研究課題や検討を要する問題点がかなり残存している。(一)伝承童謡とは何か、という個々を検討した上での総合的課題。(二)動物植物・天体気象に向かって発せられるハヤシヤトナエの、類型的表現と呪的心性の考察。(三)遊戯歌と遊戯との関係、つまり民謡と同様の意味での役歌の蒐集とその機能の分析。(四)子守娘達の子守歌(仕事歌)の完璧な蒐集と表現類型の研究。(五)子守歌を中心とする代表的な伝承童謡の歌詞・語句の考証。以上がこの世界における現段階での主たる課題・問題点である。本稿は、(五)に属する課題で、日本人の生活文化に密着した代表的子守歌の一句「でんでん太鼓に笙の笛」について述べたものである。

〔一〕

行智編『童謡古謡』^①(文政三年。一八二〇)に、誰しもが周知の次の子守歌が見える。

・ねえんねんねんねんこよ ねんねのお守はど引こ行たア ヤ引まを
こ引えてさ引といて引 さ引との御土産みやになにもるた引 でんく
大鼓(大)に笙(笙)のふえ引 おきあがり小法師せうぼうしにふりつゞみ引 ね引えん
くねんころり引 ころくや引まのう引さきは引 な引せにお耳がな
ご御さる引 お引やお腹はらにある時に引 枇杷ももの葉はた引べてなご御さる

引 あ引すは疾はやつからおひんなれ引 あ引かのまんまにとそへて引
ざ引んぶざんぶとあげましょよ ね引えんくねんねこよ引
江戸時代後期、江戸浅草を中心に歌われていたものを、その序文めいたものからしてもわかることであるが、実際に見聞き書き留めた貴重な事例である。行智は子守歌を「寝させ歌」「目ざめ歌」「遊ばせ歌」の、その機能面から三種に区分して採集記録している。これは当然「寝させ歌」である。

『古奈良絵本』(天理図書館善本叢書)所収『鼠の草子絵巻別本』に「かつじうりにまいつた ねいろやいねんねこやいく」とあり、十巻本『聖徳太子伝』(寛文六年。一六六六)所載子守歌に、「寝入れく」「ねんねんねんねん」の繰り返しがあり、鷲伝右衛門保教狂言伝書小舞の書留(延宝八年。一六八〇以前)にも、「ねんねこくねんねこや…」(兎角子供達)と歌っているのが、中世末・近世初期には、広くこの癒しの呪詞でもって、子守歌がうたわれていたことがわかる。

なかでも右掲子守歌は、浄瑠璃作品が好んで利用して、たとえば次のように見える。

・ねんねこせねんねこせ ねんねこねんねこねんねこせ 音せでおよれ
犬の子犬の子 目だに覚めたら背せにきつと背負おんうて 神様かみさまへ参らう
神様の土産には でんでん太鼓に笙の笛 お山人形に花織りきせて打ちきせて…(『天神記』第一。正徳三年。近松門左衛門)

・ねんねんころゝ ねんねが守はどこへいた あの山の端に朝日影：
 『菖蒲前操弦』第四・道行御幸の里神楽。宝暦4年。竹田出雲（
 ・歌ねんねこせく いとしい者を誰がいよねんねこせく ねんねん
 が守は何處へ往た 山を越えて里へ往た 里の土産に何もろた ナホ
 ルでんく太鼓にふり鼓（『蘆屋道満大内鑑』第四。享保19年。竹田出雲）
 このように、子守歌を断片的に取り入れている浄瑠璃作品を、十五例認
 めているが、右引用例のごとく、土産の品の部分まで入れている作品が
 いくつがある。

行智『童謡古謡』に近い時期に編まれたと思われる『朝岡露竹斎先生
 手録子もり歌手まり歌』でも、同様に次のようにある。

・ねんくよころくよ ねんねがもりはどこいた あの山越へて里へ
 いた 里のみやげに何もらふた でんでん太鼓に笙の笛
 これは尾張地方の用例としておいてよかる。地域的広がりをもって伝
 えられてきたという点で、加えて次に、明治以後の資料によって五例を
 示しておきたい。

・坊やお守は何所にいたア 山を越えて里往たア 里のお土産に何
 貰たア でんでん太鼓に笙の笛（『あづま流行時代子供つた』。明治27年）
 ・でんでん太鼓に笙の笛 起き上り小法師に犬張子（『日本歌謡類
 聚』・岩代国北会津郡。明治31年）
 ・里の土産になに貰た でんでん太鼓に笙の笛 起きあがり小法師に
 犬張子（『日本伝承童謡集成』子守唄編。兵庫。昭和22年）
 ・里の土産になにもろた でんでん太鼓に笙の笛 あまい甘露におこ
 し米（同。奈良）

・でんでん太鼓に京の笛 京の笛なら音がよかる ぴいびい鳴らして
 聞かせましよう（同。福岡）

以上の用例から見ても、この子守歌の長い時間と広い地域への伝承を改

めて確認できる。日本の子守歌の歴史においては、必ず取り上げられる
 べき歌であつて、民衆生活に深く浸透した歌謡の一つであると言える。
 そこで本稿では、「でんでん太鼓に笙の笛」の解釈について 簡潔に
 述べておきたい

【二】

里の土産として歌われる「でんでんだいこにしようのふえ」の部分は、
 ほぼすべての民謡集や童謡集がなんの疑いもなく「でんでん太鼓に笙の
 笛」と理解し書いてきた。「一」で掲出した事例を見てもその事は見て
 取れる。吾郷寅之進氏との共著『わらべつた』（昭和51年刊）でこの歌を
 取り上げた段階ではふれていないが、「でんでん」が太鼓の鳴る音に相
 当するから、「しよう」の部分も笛の音の形容であるのが自然で、後に
 私なりの理由を述べることく、「ひよう」が変化したのではないかとい
 う思いをずっと懐いてきた。その後、民謡童謡研究を精力的に進めてお
 られた右田伊佐雄氏は、その著作『子守と子守歌 その民俗と音楽』^④・
 第三部・代表的な子守歌五編 その謎 の項で、「笙」ではなく「ひ
 よう」が本来ではないか、という意見を述べておられる。傾聴すべきと
 ころであつて私の疑問とも一致するので、抜粋して要点を次に引く。
 （内は右の著書にもとづく、真鍋の補足）

「しようの笛であるが、一般に笙の笛と書き慣らわされてきた。
 『童謡古謡』、『朝岡露竹斎先生手録子もり歌手まり歌』の歌詞を引
 用 以来、歌詞のこの個所は、笙の笛の字を当てるのが当然とし
 て誰も疑いをはさまなくなった。「しようの笛に笙の字を当てるな
 ら、どうしても雅樂の笙のような玩具笛ということになってしまつ。
 零歳〜一歳児用の玩具に笙というのは果してふさわしいであらう

か。「嬉遊笑覧」巻六下「翫弄」における「伊勢土産の笙の笛」の部分を引き、笙の笛が伊勢参宮のみやげの品として全国的に人気があった¹⁾。斎藤良輔氏の紹介で、児童用品研究会著『日本玩具集』(一九一七年刊)を調べた結果、そこでは笙ではなく簡単な横笛のことを笙の笛を言ってきたことを突き止め、右田氏所有、伊勢土産の篠竹の一本笛とほぼ同じものであることを確認され、わたしの所有物も古い伊勢土産品に従った、いわゆる笙の笛であることはほとんど疑いがないものと知れる。細部はともかく、横一本の笛であり、それなら零歳はともかく一歳児でなんとか吹けよう²⁾。では雅楽の笙とは形状も音色もまるで違う横一本笛が、なぜ「笙の笛」と呼ばれてきたのだろう。これは大きな謎である。この謎を解くために、子守歌の「でんでん太鼓に笙の笛」の箇所を全国各地でほかにどのようにつたっているか、調べてみた。として用例を列挙。笙の笛の部分、各地「御所の笛」「ジューの笛」「京の笛」「ひよの笛」とある事例も紹介し、先の各地の例の中でただ一つ、新潟県の「でんでん太鼓に笙の笛」というのがあったが、振り仮名の「ひよ」は、実は「ヒョー」の意味であり、これがこの歌の古形をとどめたものではあるまいか。「わずか一例しか現存しないものを過大評価しているように読者は思われるかもしれないが、この歌に關していえば、過去の採集記録者の大半が「笙の笛」という強い先入感で伝承者の歌に接してきたことに問題がある³⁾。「この子守歌の別名『江戸子守歌ともいうように、江戸を中心として全国に伝播した。その江戸では少なくとも江戸中期以来「ヒ」を「シ」に訛る。朝日の光がアサシノシカリ、(中略)「ひよの笛」が「シヨウノウエ」になり、いわゆる雅楽の「さう(そう)の笛」の連想から「笙の笛」の当て字がなされたものである⁴⁾。

以上「ひよの笛」とあるべきところが、「笙の笛」として伝承されてきたこと、伊勢土産として売られていた笙の笛というの、いわゆる笙を模倣した笛ではなく、一管の篠笛であったこと、加えて「ひ」音の「し」音化にもふれて、したがって本来は、「しょう(笙)」は「ひよの」であったと述べられた。このことに真剣に取り組んだ考察として高く評価されねばならない⁵⁾。

さて、私も「笙の笛」とあるところは、長らく疑問であった。このたびの右田氏の考察に触発されることもあって、次に私なりの資料で詳しく述べておきたい。結論は「でんでん太鼓にひよの笛」が本来の意味であるということであり、伝承という面では、さらに「でんでん太鼓にひよんの笛」を加えておくべきであるということである。「でんでん太鼓に笙の笛」を誤りという観念で捉えてしまっただけではないが、人々は笙という字を当て嵌めた事例によって、そのみに頼って、この子守歌を伝えてきたようである。

【三】

さて玩具「でんでん太鼓」は、でんでんと鳴る太鼓なのであり、それと対に持ち出された笛についても、ひよと鳴る笛とつたうのがまず自然である。ひ音からし音へ変化して、江戸時代の江戸語圏では、それがしよと鳴る笛という意味でつたわっていたのである。

説経浄瑠璃『おぐり』(御物本)・第五、てるてと小栗の結婚祝の場面は次のように語られていて、本稿においては注意すべき事例である。

小栗殿と姫君を、ものによくよく譬うれば神ならば結ぶの神、仏ならば愛染明王、釈迦大悲、天にあらば比翼の鳥、偕老同穴の語らいも縁浅からじ、まりひよとうと笛太鼓、七日七夜の吹き囃し、心こ

とも及ばれず

本論の上から注意すべきは傍線部分であろう。^⑤一説に、鞠漂蕩であろうという説がある。漂蕩はただようこと、さまようことであるから鞠は蹴られて空中をただよい、笛太鼓でにぎやかに吹いたり囃したり、の意味になるが、鞠がぼんと蹴られて空中を飛んでゆくありさまを、ただよとかさまようの意の漂蕩とするのは疑いが残る。つまりこの部分は「鞠、ひょうとう笛太鼓、七日七夜の吹き囃子」と切って 解釈すべきところであつて。ここは、

「ひょう」 「笛」

「とつ」 「太鼓」

と語っているのである。ひょうと鳴る笛 とつと鳴る太鼓 ということで、それを一つに約めてこのように表現したとしてよい。「鞠」は鞠の遊びのことを一字で言いあらわしている。宴たけなわの楽遊びの様子を、人々は鞠の遊びに興じ、笛をひょうと吹き、太鼓をとつと打って、七日七夜吹いたり囃したりして、ことばでは言いあらわせないほどにぎやかな宴であつた、といったところである。「ひょう」と鳴る笛、「とつ」と鳴る太鼓という表現の中世末期における貴重な用例である。ここに「でんでんと鳴る太鼓」と「ひょうと鳴る笛」という対の表現を明確に把握できるのである。

擬音語 + 楽器という形は、たとえば幸若舞曲『烏帽子折』に、
ていとうの鼓を打ち さつさつの鈴を振り上げ

のように見える。このように対の表現をしているのである。

この子守歌のより広い地域における採集ということも、すでに困難になつてきているように思えるが、実際に「でんでんだいこにひょうのふえ」と歌っている人もいた。今様を中心とする歌謡研究に大きな成果をあげている植木朝子氏の母上から、以前報告していただいたのであるが、

でんでん太鼓にひょうの笛

茨城県那珂湊で育つた小神野ヨテさん(明治44年生)は、「でんでんだいこにひょうの笛」と歌つて下さつたという。何回か聴き直して、「しようの笛ではないのか」と尋ねても、自分は親からはっきり「ひょうの笛」と教わり、自分もそのように歌つてきたのだと話して下さつたという。フィールドにおける貴重な報告である。江戸時代末期まで、北関東においても「でんでん太鼓にひょうの笛」が確認できるのである。

奈良市、東大寺の近くに氷室神社がある。枝垂れ桜でも有名な神社であるが、この境内には多くの石灯籠が立ち並んでいる。その中に、本稿の目的にあつては、参考とすべき一基があることに気付いた(写真参照)。文政二年献納とあつて、成立も明らかであるが、この石灯籠の中台・六面(格狭間)に、当時の子ども達の玩具が彫られていて、その中の二面にでんでん太鼓(打つ棒とともに)と小さな喇叭(らっぱ)のような笛が鮮やかに彫られている。(他の面は、独楽、弥次郎兵衛、凧糸・巻き、風車である)。文政期あるいはそれ以前、奈良町のみならず、広く上方にも及ぶ子どもたちの遊びが見えてくる、有益な証拠資料であるが、この子守歌にもヒントを与えている。まず笛は、篠竹でできた一管の横笛でもなければ、もちろん雅楽笙の笛の玩具でもない。小さなラッパ(あるいはチャルメラのような笛)であろう。「でんでん太鼓」と並べて一対として彫られているところからして、「ひょうのふえ」は「ひょうの笛」であり、笛はラッパのようなタテ笛のこととして認識して歌いかつ伝承していたことも、一つの事実としてよいかと思われるのである。そうしたことを確認させる絵柄である。少なくともこの格狭間から、上方における一つの理解とイメージがはっきりする。因みに近松門左衛門作『国性爺合戦』(正徳五年初演)・第二において、「らっぱ・ちやるめら」の音を、

ひやうひやうとこそ聞こえけれ

と書いていることも添えておいてよい。平出樗二郎『東京風俗志』下巻、

玩具の絵の中にも、一管の横笛とともにラッパのおもちゃが並んでいる。ひよこの笛である。

加えて「でんでん太鼓」も、石灯笼に描かれているのは、柄のある手太鼓で、中には三つ巴の模様がある。片側に描かれているバチ棒で、でんでんと叩いて遊んだのであろう。『童謡古謡』他でも続いて「おき上り小法師に振り鼓」とあって、そこに振り鼓（雅楽の振り鼓に似せて作った玩具。小型太鼓を直角に重ねて、柄となる棒で貫き、太鼓面の横に、珠・豆などを糸で結んで付けて、左右にくるくる振ると鼓面に当って鳴る）が出るので、「でんでん太鼓」はむしろその石灯笼に描かれたような太鼓を言うかと思えてよい。「振り鼓」は振って鳴らす。「でんでん太鼓」は叩いて鳴らす。これでたのしい四種の玩具が揃ったのである。

「でんでん太鼓に笙の笛」と理解した伝承が日本全土に及んでいる。これはこれで、すでに国民の常識になってしまった感があった一つの型となっている。しかし笙の笛となる以前、つまりより原初的で本来の伝承の有力な型は、「でんでん太鼓にひよこの笛」であったと見ておいてよいのである。「でんでんと鳴る太鼓」と「ひよつと鳴る笛」ということである。

さて、さらに加えて「でんでん太鼓にひよんの笛」の伝承があることにもふれておく必要がある。

以前、「でんでん太鼓にひよこの笛」の本稿の元になる短文を外村南都子教授にお送りする機会があったが、その返信で「でんでん太鼓にひよんの笛」と歌う系統があることを述べられた。その後、お知り合いの遠藤洋子氏が持つて来て下さったという「ひよんの実」を届けて下さったことがある。（写真 参照）早速植物図鑑を見ると次のようなことが書かれてある。「イスノキ」は別に「ヒヨソノキ」とも呼ばれていて、本州西南部・四国・九州の山中に自生する常緑高木で、まんさく科。大き

なものは高さ20メートル、幹の直径一メートル内外に達する。時折、大きな虫えいを作り、子供がその孔を吹いて笛にする。ヒヨソノ木はその虫えいを吹く時、ひょうひょうと鳴る音にもとづく名である、と説明がある。中癭ちゅうえいは木の枝などに昆虫が産卵あるいは寄生したために出来た虫癭。説明があるように、吹くとひょうひょうと美しい音が出る。『大和本草』・十二雑木の項には「蚊子樹。ヒヨソノ木ト云。其実蚊ノヤドリト云。内ムナシ。長一、二寸。西土俗、猿瓢ト云」。『和漢三才図会』も「俗云此與牟乃木、其木名伊須」と説明を加えている。また『俚言集覽』は「ヒヨソ」の項目で『物類稱呼』を引き、蚊子木を尾州にてキヒヨソと云い、その虫の巢を、駿州にては祭礼の笛にして吹く所があると云う。

「でんでん太鼓にひよんの笛」の系統があったことを加えておいてよい。すなわち「ひよん」と表現する系統である。もちろんこれも「ひよんと鳴る笛」であるから、笛の音の形容であった。「ひよこの笛」も「ひよんの笛」も同系統のつたいぶりである。ただし「ひよんの笛」は、イスノキの虫癭の笛のことで具体的である。いまのところ「ひよこの笛」よりも古い形を伝えているとは言えないが、「笙の笛」ではなく、その音の形容としての、ひょうひょうと鳴る笛という意味では、「ひよこの笛」と見る説をささえる事例ということにもなる。

なおこのヒヨソの笛の事は、壺井栄『母のない子と子のない母と』（昭和26年刊。昭和23年には、毎日小学生新聞に連載された）の中に描かれている。子ども達が親しんでいたことが、よくわかるので引用しておきたい。

「なんてまあ、捨ちゃんそっくりの顔だろうね。むかーしそんな顔をして笑ったわ。四万八千日まいりに、いっしょに行ったことがあるのよ。ヒヨソの実とったわ。そのときチロちゃんもとってくるよ。」

いい」

「ヒヨンてなに？」

「そんな木があるのよ。史郎ちゃんにきくといい」(中略)
 観音山につくと、ふたりはまさきにヒヨンの木のほうにはしりま
 した。なんとしたことか、笹一はもうずつとまきにきていたらしく、
 ヒヨンの笛を鳴らしながらこちらへやってきます。

ヒヨンの笛が、子ども達の大きな関心事であり、大切な玩具であったこ
 とがわかる。この小説の舞台は、言うまでもなく瀬戸内海・小豆島であ
 る。

〔四〕

この寝させ歌は、「ころ／＼や引まのつ引さぎは引…」から、兎の耳の
 長い理由をつたう第二段。「あ引すは疾つかからおひんなれ引…」から最後
 ままで、目ざめたときの馳走のたのしみを歌つのが第三段である。第二段
 は特に独立して歌われる場合が多く、明治期以降も、「あれは母のつは
 りに 枇杷の葉好んでそれで耳が長いぞ」(岡山県)、「お母さんのおなか
 に居るうちに 柳の若芽をたべたので」(福島県)、「おつかさんのおなか
 に居た時に、椎の実榎の実たべたから」(千葉県)、「お母さんのおなかに
 いる時に 枇杷の葉笹の葉たべたそな…」(鳥根県)などと歌われている。
 また「なして耳が長いか 谷んで生まれて敵で育つて、谷のそも聞きた
 し敵のそも聞きたし それで耳が長いよ」(広島県)のように理由を歌つ
 ものもある。この広島県の歌は、同地方を中心とするいわゆる中国地方
 田植歌(田植草紙系歌謡)としても伝承されているものであって、背後
 に、広島・鳥根両県山間部に残る、「山の神は兎に乗って山々を巡り
 木々に若芽を授けてゆく」という俗信がある。第三段の「おひんなれ」

でんでん太鼓にひょうの笛

は、目を醒ませなさい。起きなさいの意(「オヒンまたはヲヒル 貴人が眠
 りから目をさますとか、起き上がるとかすること。婦人語」(日葡辞書))。
 『幼稚遊昔雛形』(天保15年刊)では、子守唄として、この寝させ歌に
 相当する第一段と第二段に加えて、

やアまで木のかずかやのかず しちりがはまではすなのかず ひよ
 うたんばたけぢやけしのかずう ねんねこくねんねこよ

と歌っている。そして「比うたをつたふには すこしからだをゆすりな
 がら」とし、「いかなるなきむしも ねることめうなり」と結んでいる。

注

- ① 新日本古典文学大系62『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙遮一曲 琉歌百控』
 (岩波書店)所収、真鍋昌弘校注「童謡古謡」。
- ② この子守歌の事例・考証は、真鍋昌弘『中世近世歌謡の研究』(昭和57
 年、桜楓社)に所収。
- ③ 真鍋昌弘『日本歌謡の研究 閑吟集以後』(平成4年、桜楓社)・
 ・順礼歌謡と浄瑠璃作品の章参照。
- ④ 平成3年刊(東方出版)。
- ⑤ 右田伊佐雄氏はこの後、平成4年に『手まりと手まり歌』(東方出版)
 を上梓されたが、同年6月逝去された。
- ⑥ 新潮社日本古典集成『説経集』。東洋文庫『説経節』(平凡社)。ともに
 不詳としている。
- ⑦ 明治35年刊(富山房)

(関西外国語大学教授)



写真



写真